



何とも猛暑続きの夏だったので、一足先に、徳佐盆地をひた走る SL山口号の背後に聳える十種ヶ峰の雪景色で少し涼んでいただくことにしよう。2枚添付した写真は、約半世紀前になる1976年2月に十種ヶ峰東稜を仲間と登っている私と仲間たち。かなり上部まで到達した頃の撮影で、取り付き付近は膝までの積雪で、ワカンジキなしには歩けなかった。上写真の奥、前から二人目、下写真は山頂での記念写真で、左端の「尖がり帽子」を被っているのが私である。山頂は激しい吹雪に襲われていて展望は全く効かなかった。イラストの左側斜面が東稜ルートになる。この時は徳佐駅から歩き始めて、福谷川を詰め、稜線手前にテントを立てて一泊し、翌朝に東稜伝いに山頂に登ったのだが、今ではこんなルートを冬に登る体力は、全く残っていない。

さて、石州街道シリーズも残り6回、半年となった。石州街道の全長が約52km、現在、野坂峠経由で津和野城下まで残り7kmの地点に来ている。ということは、これまで $(52-7)/52=86\%$ を歩いてきたことになる。一方イラストの回数は30回目だから $(36-6)/36=83\%$ となり、ウォークの進捗とイラストの進捗はほぼ計画通りとなる。と書いたが、これは別段意図していたことではない。やはり街道沿いの歴史や特徴ある自然風景をピックアップして、この街道の魅力をお伝えしたいという気持ちで、何を採り上げるか色々悩んできた。それも今時点では総ての対象を選択済みで、イラストも36枚描き上げた。あとは原稿書きを残すのみである。書く方はそんなに苦にならないから残り半年楽しんでいくつもりである。(2024.9.22 記)

イラストでたどる石州街道 ③〇 十種ヶ峰



徳佐盆地に入ると左手に高く聳えているのが標高989m、長門富士とも称えられる十種ヶ峰である。長門風土記によればこの山の由来は、或る神様が十種の宝物を山頂に埋めたことによるといわれる。筆立峰だけに山頂からの眺めは抜群で、筆者も数度登ったことがあるが、遥か日本海瀬戸内海も見渡せる人気の山である。そして眼下には広大な徳佐盆地が見下ろせる。その成り立ちについては、50万年以上前に野野山火山群の爆發によって津和野方面への流れが堰き止められると巨大な古徳佐湖が形成され、その結果、逃げ場を失った古徳佐湖の水は長門峡に流れ込んで阿武川となり、徳佐盆地が出来たと考えられている。

文・イラスト 古谷眞之助

